

人間労働の原理
—— 初等教育教員のための経済学 ——

鈴木 敏 紀*
(平成13年 7 月13日受理)

要 旨

本稿は、小学校社会科教科書に記載されている経済問題において直接的に見えてこない経済学理論の一部を初等教育教員のために体系的に整理することを目的としたものである。

小学校社会科教科書の全般の特徴は写真、図、イラストなど豊富に取り揃え、可視的に理解を深めるように編成されている。経済問題においては、農業、漁業、林業などの第1次産業、製造業などの第2次産業、商業、運輸・通信、サービス業などの第3次産業が「働く人々の様子」を写真等で前面に出し、可視的に問題意識を高め、理解を深める工夫がなされている。

このような教科書を使って児童に社会科を教える教員に必要な能力は、その基本としてある程度の理論を身につけていなければならない。もし教師に理論的理解がなかったならば、皮相的な教育に終始してしまうであろう。写真や図で示されたものの背後にある理論を見据えての教育がなされなければならない。教師は児童に抽象的な理論を教えるというのではなく、人間の社会関係をその発達段階に応じて理解させなければならない。この目に見えない人間の社会関係を理解させるためには、教師自らが理論武装していなければならないのである。

そこで、本稿では小学校社会科教科書の経済問題を「働く人々の様子」を中心に抽出し、教師用指導書の「ねらい」を参考にして、経済学理論としての「人間労働の原理」の体系化を試みたものである。

KEY WORDS

human labor	人間労働	abstract labor	抽象的労働
concrete labor	具体的労働	private labor	私的労働
social labor	社会的労働	complicated labor	複雑労働
simple labor	単純労働	skilled labor	熟練労働
unskilled labor	未熟練労働	necessary labor	必要労働
surplus labor	剰余労働	productive labor	生産的労働
unproductive labor	不生産的労働		

1. 小学校社会科教科書に示されている「働く人々の様子」

小学校の社会科教科書のなかに多くの人々が様々な産業分野で人々の働いている様子の写真資料、絵画資料、イラストそして想像図等で示されている。その働いている様子は最も古い時代のものから最も新しい時代のものまで豊富に取り揃えて示されている。先史時代のものは狩

* 社会系教育講座

猟、漁撈、採集、農耕、牧畜から道具の製作、家事など様々な形態の労働が想像図として示され、新しい時代のものは、機械化され、整備された大工場での大量生産方式の写真が示されている。また看過しえない労働として道路・橋梁工事、治山・治水工事、大仏・寺院・城の建築などの土木建設工事から田畑の開拓工事、水利工事などにいたる公共工事が幅広く示されている。そしてそこに共通して示されている労働する人々の姿は、ひとり孤独な姿で仕事に励んでいるものではなく、多くの人々が組織的に協力しあって働いているものである。その労働における協力関係は、狭いひとつの集中した場所的空間のなかにあるのみでなく、複数の分散した場所的空間における相互の連鎖、さらに地球規模での無数の場所的空間の相互の連鎖のなかで示されており、人々が何らかのものを通して相互に結ばれている関係が示されているのである。ひとつの小さい地域から広い世界へとその結びの糸は陸上、海上、航空等の交通運輸手段と情報通信手段である。

現代の人間の生活空間は、原始の単なる点から複数の点を結んだ面へと拡大し、その面がまた複数の線によって結ばれて一層の拡大した面へと進展し、最終的には地球上にフロンティアを消滅させる規模にまで拡大し、それはいまでは宇宙空間にまでその広がりを拡大している。その拡大規模は無限大といってよいであろう。人間のこうした時間的・場所的空間の無限大的拡大の可能性はいかなる要因によるものなのか。このような可能性は他の動物には決して見られるものではない。他の動物は、その種類によって一定の時間的・場所的空間に閉じ込められている。たとえ渡り鳥であっても一定の地域から無限大への地域への広がりの可能性は持ち合わせてはいない。いったいその要因は何か。

その根本要因は他の動物と区別された人間にしか備わっていない「人間労働」の性格によるものである。この「人間労働」を学校教育現場での社会科教科書でどのような取扱方がされているのだろうか。それを経済学原理に基づいて理解することは社会科教育と経済学理論との相互浸透を図る上で有意義なことと思われる。

2. 小学校社会科教科書に示された「働く人々の様子」から見えてくる人間労働の本質

(1) 「働く人々の様子」の背景

小学校の社会科教科書では、働く人々の様子が、狩猟、漁撈、農耕・牧畜、林業、各種製造業（食料品・繊維・衣服・家具等軽工業、自動車・家電・事務機器・化学等の重化学工業）、商業（商店、スーパー、デパート、卸売）、運輸・通信業（トラック・鉄道・船舶・航空等の運輸業、新聞・放送等の通信業）、サービス業（廃棄物処理、清掃、介護、消防、救急、交通安全等）といった産業から、各地域に古くから継承されている伝統工業、そして自家消費的な家事労働にいたるまで多岐にわたって示されている。そこにはまた原始・古代から近・現代にいたる歴史の変遷も示されている。さらに人々の働く様子は身近な地域から地球規模の世界にまで拡大して示されているのである。

農耕・牧畜では、その中心は稲作（米づくり）であるが、各種の畑作物、ハウス栽培、園芸作物、果物そして酪農にいたるまでほとんどすべてを網羅している。またここでは特に新田開発や水利事業、治山・治水事業がその歴史的背景としても語られている。

漁業では、遠洋漁業、沖合漁業、沿岸漁業、養殖漁業などについて、その近代的漁法から伝統的漁法にいたるまで詳細に示されている。

林業では、単に森林伐採による材木の供給ばかりでなく、山の幸（椎茸や山菜など）にもふれており、さらに森林保護による自然保護活動にも触れている。

製造業では、身近な食料品工場から自動車工場、その他地域の代表的な工場、例えばピアノ・オートバイ工場、繊維・織物工場などが取り上げられている。

商業では、スーパーマーケット、デパート、コンビニエンス・ストアや個人商店が大きく取り上げられている。また商社、問屋、卸売市場も取り上げられている。

運輸・通信業での運輸では、陸上輸送のトラック輸送、海上輸送では船舶が示されている。鉄道輸送や航空輸送では直接働いている様子は示されていないが、鉄道や航空輸送の図解は示されており、鉄道では鉄道保線工事の写真が示されている。

通信では、情報通信の代表として新聞社と放送局が主たる情報通信機関として取り上げられているが、郵便局が示されているものもある。またこれとの係わりとしてテレビ工場、IC工場やコンピューター通信が取り上げられている。

サービス業としては、「スキー場で働く人」がひとつだけあった。しかしこの分類に公務も含めるとしたならば、公民館・図書館の仕事、廃品回収・ごみ処理の仕事、消防・救急活動、交通安全活動などの公務が取り上げられている。

(2) 産業の種類に重点があるのか、働く人々の様子に重点があるのか。

社会科教科書で取り上げられている産業の多くは、そこで働いている人々の様子がイラスト図、想像図、写真資料、絵画資料等で示されている。しかし直接働く人間が示されていない産業もある。すなわち教科書では働く人間の写真や図が示されている産業は諸産業のなかからのひとつの具体的な事例であって、そこから多くの産業や身近な地域の産業を調査し、学習することとなっている。

すなわち社会科の教科書は、産業にはどのようなものがあって、それがどのように営まれ、どのような問題があるのかを、地理的、歴史的、あるいは社会・経済的に考察することが主眼とされて構成されている。したがって社会科教科書の主眼と構成に基づいた産業や産業構造だけに目の重点が片寄って見てしまうと、人間労働そのものの本質が見えなくなってしまう恐れがある。社会科教科書が働く人々の様子を詳細に示しながら、教師も児童も人間労働の本質が見えず、見えるものは単なる表面的な具体的な産業とその生産物だけである。教師は少なくとも次のような問いをしなければならないのではないだろうか。

たとえば次のような質問にどのように答えたらよいか。

問1. 人間はなぜ狩猟・採集・漁撈・農耕・牧畜など多様な生産活動をするのか。

問2. 人間はなぜ道具をつくり発達させたのか。

問3. 人間はなぜ多くの人々と協力して労働するのか。

問4. 人間はなぜ工業を発達させたのか。

問5. 人間はなぜ運輸・通信手段を発達させたのか。

問6. 人間はなぜ商業を営むのか。

問7. 人間はなぜ富を蓄積しつづけるのか。

問8. 人間はなぜ自然環境に適応しつつ、それを変化させるのか。

これらの質問に小学生は答えられなくても、少なくとも社会科教師は答えられなくてはならない。さもなくば、社会科教育における産業経済教育は平板で皮相的な深みのないその場かぎ

りのものになってしまうであろう。出版社の『教師用指導書』ではどのような指導法が書かれているのだろうか。

3. 「教師用指導書」にある指導法—東京書籍の『新しい社会』の場合—

(1) 3年生の「スーパーマーケット」

この単元のねらいの一つとして「商店や商店街では販売について工夫していることを理解できるようにする。」とあり、その学習展開では「スーパーマーケットでは販売促進のためのいろいろな工夫をしている」ことを気付かせるとある。そこでこの学習活動と内容の一つである「働いている人の様子」では、「レジの人」、「裏で働いている人」、「トラックから運んでいる人」、「魚を売っている人」が示されている。ここで示されている「働いている人の様子」の学習は、協業と分業の労働形態を学習させようとしていることが理解できる。ここでは人間労働の社会的性格として位置づけられる協業と分業が目に見える形で示されている。そしてまた、この協業と分業が販売活動にとって効率的であること、すなわちより多くの品物の販売を可能にし、収益率を高める労働形態であることをも理解できるのである。もっともそのほかにそれぞれの持ち場での創意工夫というものがあり、それらの労働内容において具体性をもって示される必要がある。販売活動における具体的労働の分析が必要となってくるのである。

(2) 3年生の「かまぼこ工場」

この単元のねらいの一つに「地域の生産活動の特色と工夫について理解させ」、「生産活動の様子を調べる」ということがある。その学習活動と内容で、「働く人」が「原料」→「製造工程」→「製品」→「発送」までの全工程に登場し、協業と分業の労働形態が示されている。これはスーパーマーケットとの違いがあり、製品を作るという生産過程が示されていることである。したがって、原料と製造機械が示されているばかりではなく、工場内の種々の設備や装置が示されている。例えば、水道設備、電気設備、洗浄装置、パイプラインなどがあることである。ここに人間労働に必要な労働対象としての原料・補助材料（水、電気、ガス等）及び労働手段としての機械・装置・建物など、生産手段が全体として示されている。これらの生産手段に従業員たちがそれぞれの持ち場で、真剣に働いている姿が示されている。これら従業員は人間としての特殊な能力としての労働力を発揮している。すなわち彼等は目的意識的に頭脳と手足を使って、その持っている技能や技術を発揮して働いているのである。ここに人間労働における3要素が理解される。すなわち、それは労働力、労働対象、労働手段である。労働力は労働主体として理解され、労働対象及び労働手段は労働客体としての生産手段として理解されるのである。

(3) 3年生の「ねぎをそだてる」と4年生の「自然と向き合う産業」

この単元の学習対象は農業と漁業であり、そのねらいは、「地域の重要な生産活動は、自然環境を生かしながら営まれていること」を理解させること、「自然条件に適応して、特色のある産業や生活があること」を理解することにある。この自然と人間との関わりを農業と漁業における具体的な生産物、例えば農業では、ねぎやれんこん、その他の農産物を取り上げられており、水産物では貝・さんま・まぐろ・のり・わかめ・ほやなどが取り上げられている。これらの農

業と漁業をととして人間労働の本質が人間と自然との物質代謝活動であることが理解されるのである。この人間の物質代謝活動としての抽象的次元の労働がそれぞれの自然環境に適応して具体的労働に上昇転化するるのであるが、この人間労働の二重性こそが人間の社会生活において多様な生産様式や文化様式を生み出す根源なのである。4年生の「いろいろなくらしとわたしたちの国土」の単元で例示されている「山地」・「低地」・「あたたかい土地」・「雪国」のくらしなどの地形や気象などの自然条件の異なった地域にそれぞれに適応した多様な生産活動が営まれているのは、人間労働の二重性に根拠をもっているのである。

(4) 5年生の「伝統的な技術を生かした工業」

この単元のねらいは、「焼き物づくりの具体的な活動や体験をととして、伝統的な技術を生かした工業製品やその生産の様子に関心を持ち、それを調べる」ことにある。そしてその学習活動と内容では、「自分たちがつくった作品」と「陶工がつくった作品」とを比較させ、「どうしてこのようなちがいが出るのか、自分たちの焼き物づくりの経験で、苦心したこと、工夫したこと」を学習することになっている。ここで人間労働には、未熟練労働と熟練労働とがあることが理解される。伝統工芸の技術は一朝一夕では身につかない。伝統技術は長年の鍛練と経験の積み重ねによって身につくものであり、その技術によって初めて製品が仕上げられるのである。未熟練労働による製品は商品としての価値を持たない。すなわちそれは欠陥品であり、不良品でもあるからである。使い物にならないものは商品化はできないからである。熟練労働の手による製品は高価な商品として価値づけられる。それは未熟練から熟練にいたる技術・技能の蓄積過程において長期間の鍛練と経験の積み重ねがあるからなのである。すなわち人間労働の源泉である労働力は、その人間労働による積み重ねによって高度化するということでもある。したがって労働力それ自体にその価値の格差が存在しているということでもある。有能で高級な労働力と無能で低級な労働力という価値の格差が存在する。それはまた知能や知識が高度に発達し、同時に技術・技能が優れている「複雑労働」とその反対の「単純労働」との比較において、それらの源泉となる労働力の格差についても言えるのである。

このことについては、例えば5年生の「わたしたちの生活と情報」の単元にある「放送局で働く人々」の項目でのねらいにおいて、「放送は、技術の進歩や収入の確保によってさきえられているとともに、『正しく、速く、わかりやすく』をモットーに放送にたずさわる人の努力によって、高められてきていることに気づかせる。」とあるように、こうした人間労働は複雑労働と規定されるものであり、その成果が科学技術を発達させ、またその科学技術を身につけた労働力によって発揮される労働が複雑労働なのである。

(5) 6年生の「日本の歴史」

6年生の社会教科書(上)は「日本の歴史」となっており、直接的に人間労働の本質と形態にふれることはないが、図や絵画、イラストによって道具の発達及び労働の社会的形態が示されており、特に農民に対する搾取の厳しさが記述されている。この搾取には直接的な賦役と間接的な生産物及び貨幣という形態で労働が搾取されているのであるが、この人間労働の搾取される部分を剰余労働といい、残りの生活を維持するに必要な労働を必要労働という。例えば「五公五民」とは「五公」が農民の剰余労働が年貢としてお上に搾取され、「五民」が農民の自らの生活に当てる必要労働部分の生産物として配分されるという比率を表している。すなわち、

これは、剰余労働と必要労働との比率が5 : 5を意味しているのであり、搾取率100パーセントを意味しているのである。

以上のように、小学校社会科では、人間労働の原理が可視的に示されているという特色がある。この人間労働を経済理論として以下のように体系化することができるのである。

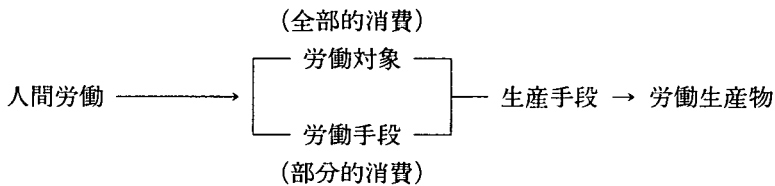
4. 人間労働の原理

(1) 具体的有用労働と抽象的人間労働という人間労働の二重性

人間労働とは、その基本において人間が自然に働きかけてものを獲得し、生産する活動である。さらに人間労働はすでに獲得し、生産したそのものに働きかけ新たなものを生み出す。すなわち人間労働は既存の労働生産物を対象として働きかけ、新たな労働生産物を生産する。人間労働の働きかけの対象となる自然及び労働生産物は労働対象と呼ばれる。この労働対象となる労働生産物は新たな労働生産物のもととなるものであるから、したがってそれは原材料と呼ばれる。また労働生産物の直接的な原材料とはならなくても、それなくしては新たな労働生産物ができない材料もある。たとえば水、洗剤、薬剤、触媒、熱エネルギー源となる木材や化石燃料（石油、石炭）及びガスなどは補助材料と呼ばれる。もっともそれらのなかにも直接的な原材料となる場合もある。これらの労働対象は労働が加わることによってその分だけ全部的に消費される。自然の一つである土地も労働対象として消費される。たとえば未開地を農地や牧場地として開拓すれば、その分未開地は減少する。また農地を牧場地や宅地に転換すれば、その分農地は減少する。このように労働対象が新たな労働生産物に転化して消費されることを生産的消費という。

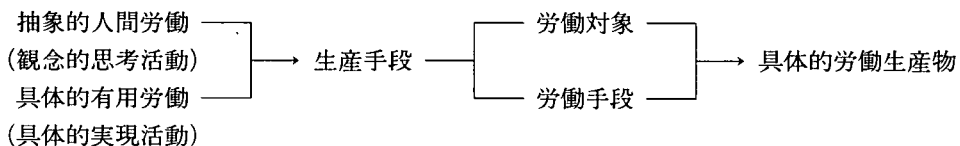
また人間労働がその労働対象に働きかけ、新たな労働生産物を生産するとき、道具などの器具類が使用される。石器、土器、木器、骨器、金属器など人間労働の歴史的展開過程は道具の発達過程でもある。狩猟用器具、採集用器具、漁撈用器具、農業用器具、牧畜用器具、土木・建築用器具、紡織用器具、戦闘用器具、遊戯用器具などの各種製作器具、そしてそれら各種器具を製作する器具製作器具、及び今日の機械や装置等にいたるまで無数の種類の機械器具類が存在する。これらのものは労働対象に働きかけ、新たな労働生産物を生産するための手段である。したがってこれらのものは労働手段と呼ばれる。また労働手段には土地・建物、その他設備も含まれる。土地は労働対象になるとともに労働手段でもある。我々人間のみならず、すべての生物は大地に根を降ろして生命を営んでいる。地球上のあらゆる生物は大地から生命の根源を吸収している。したがって土地（大地）は、労働対象であると同時に労働手段でもあるのである。これらの労働手段は、労働対象が新たな労働生産物に転化して全部的に消費されても、即座に全部的に消費されるものではない。それらにはある程度の持続性・永続性ないしは耐久性があり、したがって数回、あるいは数年間の使用が可能である。その意味で労働手段は部分的に消費されるということになり、それだけ減耗分が発生することとなる。労働手段は、そうした減耗分の累積によって最終的に使用不能となり破棄される。労働手段としての土地もそこからの略奪や不適切な土地利用（たとえば土壤汚染、地盤沈下、土壤流出、砂漠化など）によって土地が荒廃し不毛化して放棄されることがある。労働対象及び労働手段はある目的物である労働生産物を生産するための手段であることによって、両者をまとめて生産手段と呼ぶ。

以上を図示すると下記ようになる。



この人間労働には、二つの側面がある。そのひとつの側面は、具体的有用労働である。その目的である最終の労働生産物は労働生産物として抽象的で観念的に存在しているのではなく、常に具体的で有用な労働生産物として、たとえば米とか魚、衣服とか家屋とかいった具体的で有用な労働生産物として生産され存在しているのである。人間労働は、その実際の発動においては、常にこの具体的有用労働として現れる。労働生産物は常に現実的具体的形態として現れて存在する。その用途と有用性は可視的に明らかである。

もうひとつの側面は、抽象的人間労働である。人間はその労働において常に頭脳を働かす。その働きは、無意識的・本能的ではなく、意識的・目的・計画的である。すなわち労働生産物が具体的現実形態として現れる以前に人間の頭脳においてそれが図案化されている。その図案化されたものを人間は各種器官を駆使して創造し、現実化する。他の動物の創造活動がその綿密さや精巧さにおいていかに優れたものであろうとも、それは本能的であり、機械的繰り返しの単純作業でしかないのであるが、人間労働は、その創造活動においていかに粗野であり稚拙であろうとも、それは意識的・目的・計画的であり、臨機応変、自由自在の複雑作業であり、多種多様性を備えた創造活動である。人間労働の結果としての労働生産物の具体的現実形態が多種多様であることの要因は、その実現以前に人間の頭脳に備わっている抽象的で観念的な思考力にある。抽象的人間労働とは、すべての人間に共通して存在し、他の動物には決して存在していない目的意識的に図案化し概念化する思考活動をいう。この抽象的思考活動に無限の可能性が秘められており、その現実化において多種多様の無限の具体的現実形態が現れるのである。これを図示すれば下記ようになる。



以上のように人間は、労働の二重性において労働生産物を生産しているのであるが、人間がこの労働の二重性を発揮しうるためには、その根本は頭脳においてものごとを抽象化したり、あるいは具体化したりする創造的思考力が備わっていなければならない；さらに様々な知識がなければならない。それと同時にまた身体の諸器官においてものごとを創造する技能的・技術的機能も備わっていなければならない。これら知能・知識及び技能・技術は密接不可分のものであり、これらが同時的に相互作用をなして労働が発動されるのである。この労働の源である知能・知識及び技能・技術を労働力と総称される。

のである。人間の労働力にはこうした高級労働力と低級労働力という格差があるのである。これらを基として生産された労働生産物において必然的に格差が存在する。これを図示すれば下記のようになる。

低級労働力 → 単純労働 → 単純な労働過程 → 単純な労働生産物
 高級労働力 → 複雑労働 → 複雑な労働過程 → 複雑な労働生産物

(3) 未熟練労働と熟練労働

労働力の技能・技術の面において経験や訓練の度合いによって未熟で稚拙なものから熟達・練達なものまで格差がある。同じ道具・器具や機械・装置の使い方において稚拙なものと同練なものとの格差がある。そのことによって同じ種類の労働生産物を目的として生産しても、その結果はおのずから粗野・粗雑なものから緻密で繊細なものまで品質に格差がある。このように労働には技能的・技術的な熟練度に格差がある。それゆえ前者の労働を未熟練労働と呼び、後者の労働を熟練労働と呼ぶ。

熟練労働においては必然的に高品質の労働生産物が生産され、未熟練労働においては低品質の労働生産物が生産される。それは道具・器具や機械・装置の使用法における稚拙さと練達さとの格差にある。未熟練労働が熟練労働に達するに必要な条件は、技能・技術を修得するに必要な経験と訓練の時間的経過である。それは見習い期間、あるいは修行期間、あるいは実習期間と呼ばれる期間を経て一人前の自立した練達になるまでの期間である。

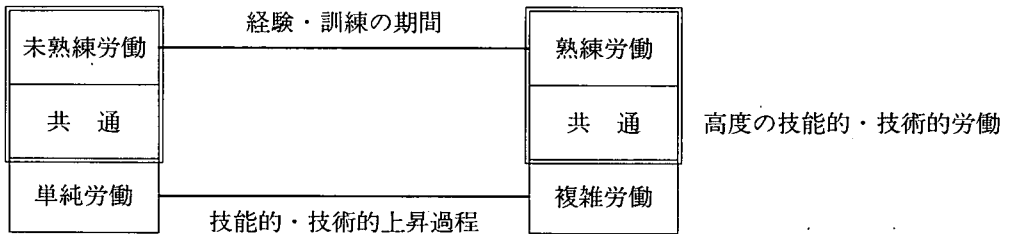
このような未熟練労働及び熟練労働といった労働は職人などの技能職において一般的に見られる。いわゆる手づくりの労働生産物、すなわち手工業製品や工芸品、あるいは大工や料理人（板前、コックなど）の作品、あるいは鳶職人などの技などにおいて未熟練労働及び熟練労働が一般的に見られる。しかしまた機械制工業においても溶接技術や旋盤技術などの工作技術、あるいは機械や装置を操作しての高度のオペレーターと呼ばれる技術職において熟練を要する技術も存在する。

未熟練労働と熟練労働、単純労働と複雑労働の概念上の違いは、前者は同一の労働手段及び労働対象の基での技能的・技術的な熟練度の格差を意味し、したがってそこには単線的な経験と訓練の発達段階的な時間的経過が存在しているのに対して、後者は労働手段及び労働対象をそれぞれ異にし、それぞれの労働過程において単純であるか複雑であるかの差異を意味する。したがって未熟練労働は経験と訓練を積むことによって熟練労働に達する性質の労働であるのに対して、単純労働はその経験と訓練のいかなる積み重ねにおいても複雑労働に達するものではない。職人の世界においては、丁稚は経験と訓練の積み重ねによって練達の親方になりうるが、単純労働者は、その単純労働の積み重ねによって高度の専門的技術者になりうるものではない。単純労働と複雑労働は、未熟練労働と熟練労働における同じ土俵の上に立ってはいないのである。すなわち単純労働は単純な労働過程という時間的・場所的空間に位置し、複雑労働は、単純な労働過程とは異なる複雑な労働過程という時間的・場所的空間に位置しているのである。これに対して未熟練労働と熟練労働は技能的・技術的に同一の場所的空間に位置しながら、その熟練度において異なる時間的空間に位置している。

もっとも単純労働と未熟練労働とは共通の側面がないわけではない。未熟練労働は技能的・技術的に未熟であるがゆえに単純労働のレベルから訓練や修練を積むこととなる。それはひと

つひとつの技能的・技術的レベルを上昇していく過程でもある。その結果が最終的に熟練労働として開花する。したがって熟練労働も複雑労働ともその共通性をもつこととなる。しかし単純労働の積み重ねが複雑労働への上昇するのではない。未熟練労働は、その初步的段階における単純労働から徐々に上昇して熟練労働となり、その技能的・技術的レベル及び知的・知識的レベルにおいて複雑労働となる。

以上のような関係を図示すれば、下記のように表現される。



(4) 私的労働と社会的労働

人間は、自分自身が生きていくために自然に働きかけ生活手段を獲得するのであるが、その労働がまったく個人的に行われ、その獲得物または労働生産物がすべて排他的及び個人的に消費されるものであるならば、その労働は私的労働と呼ばれる。しかし人間は通常、排他性をもって孤立して生活しているのではなく、ある種の共同体のなかで複数の人間が社会的協力関係のもとで生活している。消費生活においても生産活動においても社会的協力関係が存在する。それはまず協業である。狩猟、漁撈、採集、農業、林業、牧畜業などから、建設・製造、商業・運輸・通信・その他用役などに至るまで、すべて複数の人間が協力関係にあって、それらを営む。こうした社会的協力関係によって生産活動を行うことを協業という。

協業には単純協業と分業的協業とがある。前者の単純協業とは、複数の人間が同一の場所的空間において同種の労働形態（姿態）での作業活動を行う。たとえば狩猟・漁撈にしろ、農業・牧畜業にしろ、その他の生産活動にしろ、その生産活動における労働の姿が同種であることは一般的に見ることができる。

後者の分業的協業とは、複数の人間が同一の集中した場所的空間における生産工程の各種の技術的段階を役割分担し、最終的に一つの総体を作り上げる生産活動をいい、各種の技術的段階の生産工程におけるそれぞれ各人の労働形態（姿態）は異種のものである。したがってそうした分業的協業はまた技術的分業とも呼ばれる。

人間の労働は、技術的に単純な形態にしろ複雑な形態にしろ一般に協業形態をとることによって、人間労働は社会的労働であるともいう。また技術的分業が同一の集中した場所的空間から分離独立して分散した複数の場所的空間で生産された労働生産物の交換においてひとつの総体が作り上げられることを社会的分業という。ひとつの共同体内において協業及び社会的分業が行われ、さらにまた複数の共同体間において社会的分業が行われる。人間の労働はこのような無数のネットワークの社会関係のなかで営まれ、育まれているのである。このことから人間は社会的存在とも呼ばれる。したがって人間労働は、本来的に社会的労働であって、私的労働のもつ排他的性格は、その成果である労働生産物の帰属に関わる性格のものである。

例えば原始共産制社会における人間労働は、同一の共同体内においては原則的にまったくの社会的労働であろうし、他の共同体との関係では、共同体構成員総体として労働が排他的な私的労働という性格をもつであろう。すなわちある共同体内の労働生産物は他の共同体に対して排他的な所有権を主張するからである。ある共同体が他の共同体の労働生産物を欲するとき、自己の共同体内の労働生産物との交換を申し出なければならない。この交換関係のない場合、略奪、強奪、戦利品という形をとって取得するのであるが、このことはまさしく共同体と共同体との関係が排他的な私的関係であるということの意味するのである。

また奴隷制社会における奴隷労働は、社会的労働として位置づけられるものであっても、奴隷はその成果である労働生産物に対しては何らの分配にも預からないため、私的労働という性格は奴隷主に帰属する。かれら奴隷の生存は単なる家畜と同様であり、奴隷主より餌が分け与えられるだけである。その奴隷が解放され自由の身となれば、自由民としてその労働は社会的労働と私的労働の両面を持つこととなる。すなわち封建制及び資本制の社会形態における農奴、または独立自営農民や独立手工業者等の独立生産者の労働及び賃金労働者は社会的労働の側面と同時に自らの労働の成果に対する排他的な私的所有権を有する。その意味でこれらの労働は社会的労働であると同時に私的労働の性格をもつ。

(5) 必要労働と剰余労働

人間は自分自身と家族が生きていくために労働し、生活手段を獲得しなければならない。食料の獲得、衣料の生産、住居の建設など基本的な生活に必要な物資を揃えなければならない。これらの生活手段は消耗的消费財と耐久的消費財とに分けることができる。消耗的消费財とは食料や衣料などで、それらを使用することで、短時間で全部的に消費してしまうものである。耐久的消費財は生活用具として使用されるもので、数年、数十年、または数百年も使用可能なものである。家具・家財がそれである。また人間は、それらの生活手段を生産するための生産手段（労働手段及び労働対象）を使用するのであるが、その生産手段を生産するための生産手段を生産しなければならず、またその生産手段を生産するための生産手段を生産するという、生産手段の循環的生産活動を行う。

このように人間は、生活手段と生産手段を自分自身及び家族が生きていくために循環的生産活動を行うのであるが、この循環的生産活動の成果である生活手段と生産手段が自分自身と家族の生命あるいは労働力の再生産に必要とされる分量として生産される場合、それに投入される労働を必要労働という。すなわち必要労働とは、人間が自分自身及び家族の生命及び労働力の再生産に必要な生活手段と生産手段を生産するに必要な労働ということである。

ところが人間は、生産手段の循環的生産活動を行う過程で、生産用具（道具）を発達させるのである。人間の労働力は知能と技能の総合的能力を備えているものであり、したがって人間は、道具の生産過程で創意工夫と技能的発達をみせる。道具は徐々に使い勝手のよい優れた道具に発達していく。それは労働生産性の増大をもたらす。労働生産性とは下記のような式で示すことができる。

$$\text{労働生産性} = \frac{\text{労働生産物量}}{\text{投下労働量（労働時間）}}$$

すなわち、労働生産性とは、ある労働生産物を生産するために投下（投入）された単位時間当りの労働生産物量である。この労働生産性は道具の発達によって増大する。道具の発達とは技術の進歩に他ならない。道具の改善・改良・発明による道具の発達は歴史的条件や自然的条件など、風土的条件に規定されて種々様々な多様な形態の道具を生み出し、旧石器時代より一種の文化を形成する要因ともなっている。現代は、産業革命以降急速に発達した機械に象徴される機械文明の最盛期である。大量採集→大量生産→大量消費→大量廃棄の無限的拡大再生産過程は機械文明のもたらした現代的現象である。

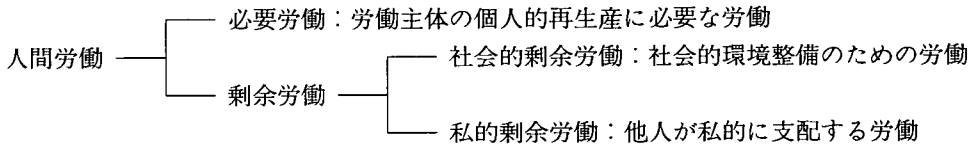
このような道具の発達は今日の大量生産を可能とする機械にまで発達させたのであるが、これによる労働生産性の増大は、人間が単に自分自身とその家族の生命及び労働力の再生産に必要な労働で日々を過ごすのではなく、他人のための、または人間社会のための労働をも可能にさせた。それはまず道路・橋梁の建設や治山・治水・水利等の土木工事、田畑等の開拓工事、さらに公共施設としての倉庫・集会所・祭場等の建設工事など、社会的環境整備のために動員される労働から、一部の権力者または権威者の個人的富の蓄積のために動員される労働に至るまで、人間の個人的に生きていくための必要労働を越えた労働を可能にさせたということである。こうした必要労働を越えた労働を剰余労働という。この剰余労働は上記に示したように社会的に共有したり、共用したりする公共施設のために動員される剰余労働を社会的剰余労働といい、一部の権力者または権威者の個人的富の蓄積のために動員される剰余労働を私的剰余労働という。この「私的」の意味は、他人が他人の剰余労働を個人的にそして排他的に自分のものとして、すなわち私的に支配するという意味である。

このような剰余労働が必要労働に対してその割合を大きくさせるためには、労働生産性を増大させることである。換言すれば、労働生産性の増大が剰余労働比率、すなわち必要労働に対する剰余労働の割合を増大させるということである。人間の歴史はまさにここにかかっているのである。社会経済的發展とは労働生産性の社会的發展であり、剰余労働比率の増大による社会的富の蓄積過程なのである。

人間労働が社会的労働という性格からその剰余労働も社会的剰余労働という性格を持つこととなる。人間の剰余労働が、社会的公共施設の整備拡充に当てられるのは、このことに起因しているのである。また剰余労働比率の増大と同様に社会的剰余労働の割合を増大させる方法、すなわち労働生産性を増大させ、その成果を社会的共有化あるいは社会的共用化という意味の社会化を促進するためには、生産手段の改善・改良・発明のみならず、協業及び社会的分業の発展による高度化がある。すなわち技術と職業の専門化による社会的分業の発展による労働生産性の増大は、社会的生産力の増大となって現れ、この社会的生産力の増大が相互連関的に生産の効率化を促し、個々の労働生産性を増大させるのである。こうした生産手段、協業、社会的分業の発達が労働生産性及び社会的生産力を増大させ、それが社会的剰余労働の割合を増大させて社会経済的發展となって現れるのである。またこれは私的剰余労働の割合を増大させる方法とも共通するものである。

以上のように人間の労働を労働力の再生産という観点から捉えると、労働生産性の概念及び社会的生産力の概念が抽出され、そこから人間の労働が労働主体の個人の再生産から人間社会及び他人の再生産という拡大した形態で捉え直すことができる。それは下記のように示すことができる。

$$\text{社会的生産力} = \frac{\text{社会的総労働生産物量}}{\text{社会的総投下労働量}}$$



(6) 生産的労働と不生産的労働

労働とは、人間の自然に対する物質代謝活動であり、人間が生きていく上で不可欠な生産的活動である、と定義されるのであるが、その労働には「生産的労働」と「不生産的労働」とに区別される性質がある。労働に「生産的」と「不生産的」という区別を付ける理由は何か。

動物の世界では、その自然との物質代謝活動は、自分自身の生命の維持と自分自身の子孫の生命の維持という限定された生命維持サイクルのなかで行われている。ところが人間の場合、自分自身とその子孫の生命の維持のための労働のみならず、他者のための労働も行われる。すなわち人間は、自己の労働がいわゆる社会的存在として機能する社会的労働において、自己と自身の子孫に必要な労働とそれ以外のもののための労働とを行うのである。すなわち必要労働と剰余労働である。

けれども人間の労働は、常に必要労働と剰余労働を同時に行っているとは限らない。一方で必要労働のみ労働しか行わない場合もあるし、他方で剰余労働しか行わない場合もある。前者の場合、また単に自分だけという場合もある。後者の場合、自分自身の生命の維持は保障されない。このように必要労働と剰余労働との関係は、不安定で不均衡なもので、均質・均等に分割されて機能するものではない。しかし人間は人間の一般的社会原理として必要労働とそれ以上の剰余労働を行うことが可能なのであって、人類史はそのことを証明している。すなわち社会的物資の量的拡大や人口数の確実な増加がそれを証明しているのである。このように人間が他者のために自己に必要な労働以上の剰余労働を行うとき、これを生産的労働といい、その反対に剰余労働が機能せず、必要労働の範囲に留まっている限りの労働を不生産的労働という。その区別はその人間の労働が自己以外の他者のための社会的物質の増加に寄与しているかどうかで判断される。

人間が自分の労働を生産的労働か否かの判断は、自分の労働の成果が自分の所属する共同体に対して物質的に貢献しているかどうかで可能となる。もっと具体的に述べれば、その人間は自分の労働の成果の一部を租税やその他貢納として共同体に納めているか、また所属している企業の利益に貢献しているか、ということである。租税や貢納には直接的労働(賦役)、労働生産物(現物)、貨幣などいろいろな形態があるが、それらはすべて労働の一部としての剰余労働の成果である。また営利企業に所属するものにとっては、必要労働以上の剰余労働は不可欠なものとして要求される。企業にとってその人間の貢献度はその剰余労働の大きさにかかっている。それが大きければ大きいほどその労働は生産的労働として評価され、それが無に等しければ不生産的労働として評価される。

ひとつの共同体においても、その共同体が拡大発展する条件は、その構成員の大半の労働が生産的労働であることであり、さらにその剰余労働の比率が大きいことであり、その反対の不生産的労働を少なくすること、さらには労働不能者を可能な限りなくすことである。「働かざるもの食うべからず。」の箴言はこのことの意味を別の角度から述べているものである。

参 考 文 献

1. 『楽しく学ぶ社会』 3－6年、平成3年版、帝国書院
2. 『小学社会』 3－6年、平成3年版、大阪書籍
3. 『わたしたちの小学社会』 3－6年、平成3年版、日本書籍
4. 『新しい社会』 3－6年、平成3年版、東京書籍
5. 『新しい社会－教師用指導書－』 3年上下－6年上下、東京書籍
6. 波多野誼余夫・稲垣佳世子著『知力の発達－乳幼児から老年まで－』岩波新書、1981年
7. 星野芳郎著作集第1巻『技術論Ⅰ』勁草書房、1977年
8. 鈴木敏紀著『経済発展と地域開発の理論』耕文堂書店、1992年
9. 有江大介著『労働と正義－その経済学史的検討－』創風社、1994年
10. K.マルクス『資本論』(1)向坂逸郎訳、岩波文庫、1964年
11. アダム・スミス『諸国民の富』(1)(2)大内兵衛・松川七郎訳、岩波文庫、1976年

The Principle of Human Labor

— Economics for The Teachers of Elementary Education —

Toshiki SUZUKI*

ABSTRACT

This paper is the thing that I consolidated the part of the theories of economics for the teachers of elementary education. The texts of social studies of elementary school are visual with a lot of pictures and illustrations. Especially the problems of economy are visual. There are a lot of pictures of the state of laboring people in the texts of social studies.

Therefore the teachers of elementary education have to understand the principle of human labor. That is the part of the theories of economics. I make no doubt that the teachers can understand the economic problems deeply, if they understand the principle of human labor as the theory of economics.

* Division of Social Studies